Ⅰ　家庭のあり方をもう一度見つめなおそう

①　一日の始まりはあいさつから

最近、地域の中で大人同士があいさつする風景をあまり見かけなくなりました。また、あいさつそのものに対する思いも違ってきていると思います。あいさつは心にホッと安らぎを与えると共に、人と人とのつながりを作る有効な手段です。

◇心を伝えるあいさつ

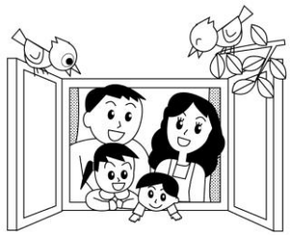
あいさつは、単に決まりきった「言葉」を伝えるのではなく、あいさつをする相手を大切に思っているという「心」を伝えるものです。

まず、家庭で、さわやかな声で「おはよう」と、一日の始まりであるあいさつを交わすことによって、家族の連携、きずなを深め、礼儀の大切さ、子どもにとっても自分の存在感を確認できると思います。

最近の子どもはあいさつができないと嘆いたり、あれこれ子どもに指図をする前に親からあいさつを心掛けたいものです。

「あいさつ」は日常的にできる取り組みであり、誰でもいつでもはじめられるメリットがあります。そして継続することで、子どもが変わり、親や大人が変わり、それが広がり、地域が変わってゆくのです。

◇まずは親から声をかけよう



子どもにとっての「ホッとする家庭」とは、ちょっとしたあいさつ、「ありがとう」「お帰りなさい」「おやすみなさい」という温かい一言をかけてもらえる親がいて、子どもの「聞いて、聞いて」の話につきあってもらえる家庭です。

親のそうした接し方の背景には、「あなたを大切に思っている、気遣っている」という思いがあります。だからこそ、子どもは親の言葉がうれしく、元気が出るのではないでしょうか。

朝一番の「あいさつ」を通して、人の温もりがまず感じられる家庭になるよう、工夫していきましょう。

②　家庭の中で役割分担をつくろう

家庭は、子どもにとって人格形成の行われる最初の場所です。わが家のきまりや行事を持ち、家族の連携、きずなを深めていくことは大変重要なことです。

そして、家族それぞれは、その役割を果たすことによって家庭が成立し、家族の力が一つになって生きる力となることを身を持って理解する必要があります。

◇家族の一員であるという責任と自覚

家庭における子どもの役割の不明確さは別の面から見れば、子どもにとって家族の一員であることの実感が無いということで不安・ストレスの要因となります。

家庭における父母の充実関係と自己の存在感が実感できれば、家庭は自分にとっての『居場所』となります。この居場所を実感すると子どもは仲間集団に主体的に参加でき、精一杯の力を発揮し、それが『生きる力』を自らトレーニングするのです。

親の働く姿を実感させ、厳しさを語ることも大切な役割です。その中でお金の大切さや、達成感などを共に学びあい、仕事をする事がなぜ大切なのかを語ることにより、子どもの好奇心をも伸ばすのです。

親の背を見て子どもは育つといいますが、これはただ見せておけば良いという意味ではありません。日常の家庭の中で、何でも本音で話し合える環境作りが必要です。家族がもう一度、家族のあり方について考えてみましょう。

③　お父さん、出番ですよ

現代の日本において、共働きの家庭が増えたことにより、子どもが親と接する時間が少なくなってきていると思われます。

また、共働きの家庭でも、家事や育児に時間を費やしているのは母親である場合が多く、母親が一人で悩みやストレスを抱え込み、気付いた時には、本来幸せであるはずの子どもとの時間が苦痛に感じるほど追い込まれている場合もあり、いかに周りの大人が気付いてあげるかが重要になってきます。そこで、出番となるのが、お父さんです。

土日くらいは休息や自分の趣味のために時間を使いたい、という声も聞こえてきます。しかし、それは母親も同じです。子どもたちはお父さんとゆっくり遊び、いろいろな話をしたいと願っています。

◇父の愛の深さと厳しさを

お父さんには、その広い行動範囲や社会経験を生かして、子どもに様々な実体験の機会を与えてあげる必要があります。そうした体験を通して、親は家庭で見ている普段の子どもとは違う一面を発見できます。子どもにとってもお父さんを見直すのによい機会となります。

最近の子どもたちに、将来の夢やつきたい職業などを聞いても「わからない」といったように、なかなか具体的な答えが返ってきません。子どもたちは、新しい場所へ行くことや、体験することによって、将来の夢を広げ、好奇心を大きく育てていきます。

お父さんと遊んだ経験や、新しいことにチャレンジした体験は子どもが先々困難や苦境にぶつかった時に、これを乗り越えるための力強いバネとなっていきます。

更に子どもが大きな困難や苦境に立っているとき、この時こそお父さんの出番です。悩む子どもとまじめに向き合い、物事に真剣に取り組む父親の態度を示すことが大変重要な役割なのです。

ひとり親であっても自信を持って役割を務めることが大切です。親と子が共に分かち合った喜びや悲しみは、きっとその後の人生の糧になっていくことでしょう。

④　悪いことは悪いとしっかりしつけよう

子どもの成長には、家庭・地域・学校の人々から褒められたり叱られたりする体験が欠かせません。こうした体験の中から、子どもたちは自分なりのマナーの示し方を学んでいきます。

ただ、自分勝手に学び、解釈してしまうこともあり、これは誰もが起こす失敗でもあります。

◇思いやりをもって、しっかりと・・・

この失敗を発見した時、子どもの生活について無関心、または関心があっても子どもの生活を指導するほど関わりをもっていないという負い目から、子どもに対してはっきりと物をいう自信がない親が多いのではないでしょうか。

子どもがした悪いことなどを社会や他人のせいにしないように、まず、子どもの目線に立って、善悪の判断を子どもなりにさせて意見を聞いてあげ、その上で良いこと、悪いことのけじめをきちんと教えることが必要です。

ただし、悪いことをした場合、極端に叱ることは、子どもを心理的に追い込んでしまい、心の逃げ場を失わせることになりかねません。

また、「体罰」は強いものから弱いものへの暴力です。大人・親が子どものためと思ってした体罰は、同時に暴力の使い方として子どもに学ばれていきます。どんなことがあっても体罰は使ってはいけません。

親は「しつけ」というものの本質や目的を見失わないことが大切です。

⑤　大人も子どもと一緒に成長しよう

大人は、真剣に一生懸命に働いているということを自分の心の中だけに秘めていて、それでいいと思っているのではないでしょうか。

大人は、真面目で真剣だということを、子どもに向かってもっとアピールしてもよいのではないでしょうか。

言葉だけでは足りないときもあります。むしろ子どもと一緒に行動しながらお互いを見せ合う中から信頼が生まれるのです。

◇親の姿をまねている

「こんな人間になりたい」「こんな人間に育ってほしい」という願い、双方の本心は根っこのところで同じなのです。大人も子どもと共に育ちあえる家庭・地域・学校を創るために「共育」という育ち合いを広げましょう。

子どもたちのことを真剣に考える大人が大勢育っていくと、子どもも自由に活動しやすくなります。

親が自分自身を振り返り、何かに気付いたらしっかりとそれを受け止め、自ら治すように努力してみましょう。その結果、子どもが大きく変化することが多々あります。親が変わり成長することで、子どもの成長が促されていく様は、子育ての醍醐味です。子育てを通じて、親が自らを振り返り、親として人間として一段と成長していく、これこそ「子育ては親育ちだ」と言われるゆえんです。

親が心にゆとりをもって、自ら成長しようと努力している姿は、必ず子どもの成長に大きな変化を与えるもので、大人は何歳になっても、自分をよりよく育てようとする心を忘れてはいけないのです。

⑥　家庭でも道徳教育を実践しよう

子どもたちの道徳観が大きく変わってきているということがよく言われますが、皆さんの身の回りの子どもたちはどうでしょうか。

かつての日本の社会では、家庭や地域が積極的に子どもたちに関わりながら、善いことは褒め、悪いことは叱り、子どもが大人になっていく中で自然にモラルや倫理観を身につけることが出来ました。

◇良い子から一考える子・思いやりのある子へ

しかし、かつての修身や道徳教育がいわゆる良い子を作ろうとする画一的なやり方であったのに反発して、個性の尊重や個人の自由の名の元に、事の善悪の判断の基準やモラルさえ否定される傾向が表れています。一部の子どもたちの中では、真面目な姿、一生懸命な姿がクライ、ダサイなどといって、イジメの対象になる風潮も見られます。

また、他人のことを顧みず自分の権利だけを声高に主張し、無制限な自由を追求する傾向も見られます。この様な風潮を食い止めるには、自由や権利について、それを行使することの意義を教えると同時に、他者の自由や権利を大切にすること、自らの行動には自分で責任をとらねばならないこと、公徳心を持って社会のルールを守ること、進んで義務を果たしていくことなどを、学校ばかりでなく家庭においてもあらゆる機会を通して教えることを一層重視していく必要があります。

◇ネットを使い始める前に…

特に子どもにスマートフォンを持たせるなど、ネット社会へ初めて身を置く時には、大人の役割が大変重要と考えます。ネットを使い、安易な気持ちで自分を売り込む、また、いつでもどこでも自由な書き込みをする…しかし、気付けばその情報が拡散し、やがて思いもしない「いじめ」や「トラブル」更には「事件」に巻き込まれていくといった事例が多く見受けられます。

地域社会で生活をしている子どもにとって、そのスマートフォンはどうしても必要なものなのか、まずはよく吟味することです。子どもの要求を鵜呑みにせず、親同士また家庭内での情報交換もしてみましょう。その上でも必要ならば、しっかりとルールを教えていくことです。

◇人権の尊重と命の尊さ

さらに、人権尊重の精神と生命に対する畏敬の念を具体的な生活の中に活かし、自然体験学習やボランティア活動、郷土の文化・伝統に親しむ活動などを積極的に進めていくことが重要でしょう。そうした体験を踏まえて子どもたちが様々な道徳的な価値に気づき、その意味や大切さについて考えを深める機会とすることが必要です。

また、生や死について学ぶ機会を設けて命の尊さや限りある生に対する畏敬の念を親や周囲の大人が、自然界の生き物や身の回りの命を尊ぶことにより身をもって示したいと思います。身近な生き物に触れるなど、体験としての命の重さを知ることが望ましいでしょう。

子どもの心に響き、感動を与える体験活動を通じて、心を育てる道徳教育を進めましょう。

Ⅱ　地域社会の持つ「地域力」を高めよう

①　見て見ぬ振りをしない地域社会を築こう

近年、地域社会やコミュニティが弱体化してきていると言われます。

大昔、コミュニティというものが初めて発生した頃、市民は納税等に加えて「街を見守る」責任を担っていたと言われています。自分たちの住む地域は自分たちの手で守る、そのためには地域で連帯していくことが市民としての務めであると考えられていたのです。

しかし今、市民として地域社会に対して責任があるなどと考える人はほとんどいないばかりか、人々の地域に対する関心自体が低くなってきているのではないでしょうか。ゴミが落ちていても拾わない、制服で煙草を吸っている子どもがいても声をかけないなど、地域のこと、他者のことに対し「見て見ぬ振り」をする無関心さが目に付くようになりました。

◇割れ窓理論とは・・・

こうした無関心さが非常に危険なものであると、注目を集めてきたのが「割れ窓理論」です。この理論は、割れた窓ガラスを放置しておくと周囲の他のガラスも次々に割られ、やがてはより悪質な犯罪の発生へと結びついていくことを例に、割れた窓ガラスを放置しておくような無関心さが、その地域での犯罪をエスカレートさせていくと述べています。

そして最近では、この理論は子どもたちの非行や犯罪にもあてはまるのではないかとの指摘がなされています。すなわち、喫煙や万引き等の比較的小さな非行を放置しておくことで、子どもたちは次第に非行行為をエスカレートさせ、やがては重大な犯罪を引き起こすようになっていくのではないかというものです。

◇大人が手本を

私たちは今、私たち自身が地域社会の一員であるということを改めて認識する必要があります。地域社会を守り、地域の子どもたちを健やかに育てていく、私たち地域の大人はその主役であると同時に、その責任を負ってもいるのです。

そのためにはもっと地域のこと、子どもたちのことに関心を持ち、行動していこうではありませんか。そして、私たち自身が手本となって、「見て見ぬ振りをしない」地域社会を築いていこうではありませんか。

② 地域社会のモラルの向上に努めよう

最近、大人も子どももモラルが低くなってきたと言われます。例えば歩きながら、または自転車や車を運転しながらスマートフォンを操作したり、電車の中でお化粧をしたり、少し前までは非常識と考えられていたことが、残念ながら社会ではどんどん普通のことになってきてしまっているようです。

「モラル」とは、日本語では「道徳」などと訳されていることからもわかる通り、人間が生まれつき持っているものではありません。成長していく中で少しずつ学んでいくものであり、子どもたちにそれを教えていくことは、家庭や学校だけでなく、地域社会の努めでもあります。

◇ゴミの氾濫やモラルの低下

しかし今、捨て看板やピンクチラシの氾濫、ゴミの投げ捨て、それらを注意しない風潮など、地域社会のモラルそのものが低くなってきてしまいました。そしてその背景には、そうした地域の状況を作り出してしまった、あるいは放置してしまった、地域の大人である私たち自身のモラルの低下があるのではないでしょうか。

子どもたちは家庭や学校だけでなく、地域社会の中でもモラルを学んでいきます。その地域社会のモラルが低かったならば、子どもたちのモラルが低くなってしまうのは当然のことです。最近の子どもたちのモラルの低さとは、子どもたちを取巻く地域社会のモラルの低さであり、それはすなわち、私たち地域の大人のモラルの低さに他ならないのです。

◇地域モラルの向上のために

子どもたちのモラルは地域社会のモラル次第です。そして地域社会のモラルとは地域の大人である私たち自身のモラル次第です。

子どもたちのモラルの低さを注意することも大切ですが、その言葉だけでは、子どもたちのモラルを高めていくことはできません。言葉で説明するだけでなく、本当にモラルが高いとはどういうことか、地域社会の中で私たち自身の行動で示していこうではありませんか。

そして子どもたちの手本として胸を張れるモラルの高い地域社会を、私たち自身の手で作っていこうではありませんか。

③ 親子で地域の行事やイベントに参加しよう

近所づきあいなど、地域の中での大人同士の交流がなくなったと言われて久しくなります。皆さんの地域ではいかがでしょうか。

子どもたちが健やかに育っていくためには、学校や家庭での取り組みもさることながら、地域の大人が子どもたちを見守っていくことが非常に重要だと言われます。

近所づきあいなど地域内の大人同士の交流は、その基盤になるものとして地域に欠かせないものと言えます。

◇まずは大人同士から

しかし、同じ地域に住んでいるからというだけでは、やはりすぐには近所づきあいを始めにくいのではないでしょうか。そんな時、親子で一緒に地域の行事やイベントに参加してみてはどうでしょう。

子どもと一緒に遊び、楽しむ中で、同じように子どもと遊んでいる親と知りあうこともできます。もしかすると子どもの友だちや、子どもが顔見知りになっている、それまで知らなかった地域の大人とも知りあえるかもしれません。

そのようにして知りあった子どもたちやその親、さらにその友人といった人たちと世間話などして顔見知りになれば、それはもう立派な近所づきあいのはじまりです。さらに子どもたちのこと、学校のことや地域のことなどが話題になってくれば、それはもう地域の大人が子どもたちを見守っているという、そのものの姿なのです。

「近所づきあい」や「地域で子どもたちを見守る」ということは、このように何もそう難しいことではありません。子どもと一緒に遊びに行ってみようというくらいの気軽な気持ちで、親子で地域の行事やイベントに参加してみてはいかがでしょうか。

④ 隣近所の子どもたちに声をかけよう

皆さんは、近所の子どもたちの顔をどれくらい知っているでしょうか？その中に、あいさつを交わしたり話をしたりすることのできる子どもたちは何人くらいいるでしょうか。

かつての地域では「〇〇さんの家の△△」と、顔を見ればその子が誰だかすぐにわかりました。子どもたちとあいさつし、ゆっくり話もできました。時には他所の家の子どもであっても注意することもありました。

ところが最近では、近所の子どもたちとあいさつを交わしたり、ゆっくりと話をしたりすることなどすっかりなくなってしまいました。道ですれ違った子どもが誰だかわからないということさえ多いのではないでしょうか。

◇地域の子どもは地域で育てる

「地域の子どもは地域で育てる」と言われる通り、子どもたちが健やかに育っていくためには、家庭や学校に加えて、地域全体で子どもたちを見守り、育てていくような取り組みが欠かせません。その取り組みの第一歩が、子どもたちに積極的に声をかけていくことです。

始めのうちはなかなか返事が返ってこないかもしれません。しかし、悪いことを注意するばかりでなく、きちんとあいさつをする、良いことは誉める、大人の側に足りない所があれば素直に耳を傾ける、返事を求めるというよりも、むしろ子どもたちを同じ地域の仲間と認める気持ちを持って声をかけ続けていくことが大切です。

やがて子どもたちと顔見知りになり、少しずつコミュニケーションが取れるようになっていく、その過程こそが、「地域の子どもは地域で育てる」ということの実践に他ならないのです。

顔がわからなくなった、あいさつを交わさなくなったと思っているだけでは、子どもたちとの距離は縮まりません。地域の大人として、まずは簡単なあいさつから、同じ地域に住む子どもたちに声をかけてみませんか？

⑤　積極的な生活環境の浄化に努めよう

人間の性質は、環境と教育によって形成されると言われます。なかでも青少年期は家庭の中から地域社会、さらにその外へと活動の範囲が広がっていき、大人の価値観や社会風潮に触れ、良くも悪くもそれらを吸収していく時期にあたります。

◇生活環境整備が子どもを守る

その大人が作り出した現在の社会は、物質的な繁栄の一方で、自己中心的・刹那的・享楽的な考え方の広まりと共に、虚栄心や射幸心をあおる風潮や性風俗の退廃、生命や道徳の軽視等、主に人間の内面に関する部分で多くのマイナス面を抱えています。

そしてこれらのマイナス面が、インターネットや捨て看板、ビラ等の有害情報となって、社会の中で青少年がちょっと手を伸ばせばすぐ届く所にあるのです。

社会に溢れる様々な情報を選択し、判断していく力を持った青少年を育てていくと共に、その力がきちんと身につくまで、子どもたちをこれらの有害な情報から守っていくことは、私たち大人に課された責任です。そして、この責任を地域の大人として果たしていく取り組みが、生活環境の浄化活動なのです。

◇積極的な生活環境の浄化活動の実施

数十年前より市内の各地域で、市民の方々による捨て看板やピンクチラシの片付け等の地域環境浄化活動が行われてきました。

当時より最も有効な手段として、地域全体で「この地域には捨て看板やピンクチラシの掲出は認めない」という姿勢を貫き、繰返し環境浄化活動を行ってきており、その結果、近年、街中ではこうした有害情報を目にすることが少なくなってきました。

その反面、スマートフォン等の普及により、大人の目につかないところでの有害情報の受取がたやすくできるようになってきました。

また、子供たちを「ネットいじめ」や「ネットトラブル」などから守るためにも、ネットによる見守りが、これからの大人の役割となっていきます。

ネット利用時に有害情報がたやすく閲覧できたり、個人情報の公開や個人への誹謗・中傷を発見した際には、速やかに「埼玉県教育委員会のネットパトロール通報窓口」に通報しましょう。

※メールアドレス：netpat-saitama@true.ocn.ne.jp

また、所沢市でもいじめに関する相談窓口があります。「もしかしたら…いじめ？」と感じたら、ご相談ください。

〇健やか輝き支援室 いじめホットライン　０４－２９９８－９０９９
〇所沢市立教育センター 電話相談　０４－２９２４－３３３３

Ⅲ　家庭・地域・学校の連携を深めよう

①　学校や先生を地域社会で応援しよう

昨今、価値観の多様化が進み、誰もが様々な手段を使って自己の意見を形として表現できるようになりました。しかし、その結果としてこれまで社会における常識的な価値が失われ、今まで尊重されてきた、いわゆる「権威」のような存在が社会の中になくなりました。

そうした中、教育という行為自体もスムースに行われづらくなっています。だからこそ、大人が連帯して子どもたちに伝えるべきことは伝えていかなければなりません。

それでは、実際に私たち地域の大人はどのように学校や先生と連携を図り、応援していけば良いのでしょうか。

◇地域の中の学校

青少年育成の視点からはこれまでも、子どもたちを健やかに育てていくためには家庭・地域・学校の連携が重要だということを訴えてきました。

総合的な学習の時間の導入は、学校と地域の間でそれを実現していくための大きなきっかけとなりました。しかし特別に設定された時間に地域が学校に頼まれて協力しているだけでは、それは本当の連携とは呼べないのではないでしょうか。

もっと日常の活動から互いが協力し合う、その中から地域と学校が一体となった本当の意味での連携が生まれてくるのだと思います。そのためにも私たちは地域の大人として、総合的な学習の時間はもちろんのこと、それ以外の場面でもっと積極的に学校に関わっていっても良いのではないでしょうか。

◇地域で応援や協力をしよう

現在既に市内の各小学校では、総合的な学習の時間を利用して各校それぞれに地域の特色を活かした体験授業等を実施しています。こうした体験授業の講師としての他、学校施設や花壇の整備、本の読み聞かせ、さらには花を活けて校内に潤いを添えるなど、様々な形で地域の大人が学校運営に携わっています。

こうした、趣味や特技、経験といったものを学校の中で活かしていく活動を通じて、地域の大人が学校の先生と、そして何より子どもたちと交流を深めていくということが、地域と学校が本当に連携しあって子どもたちを健やかに育てていくということの第一歩なのです。

学校内のことは先生に全て任せておけばよい、という時代は終わりました。学校がただ勉強を教えていくだけの場ではなく子どもたちを人間的にも成長させていくための場となるよう、私たちも親として、そして地域の大人として、できることから学校と先生を応援していこうではありませんか。

②　学校行事や学校開放日には積極的に参加しよう

これからの学校運営は学校だけで行うのでなく、学校と地域が協働して行っていく必要があると言われます。

また、家庭と学校の間での意思の疎通や連絡なしには、親や教師にも子どもたちの本当の姿を理解することは難しいという事も指摘されるようになってきました。

◇廃品回収、雪かき、草むしり、校内美化・・・・

こうした中、学校では地域に開かれた学校を目指すと共に、家庭との連絡を密にしていこうとしています。しかし、地域から見た時にまだまだ学校の敷居が高いと感じる方、あるいは親として子どものことをいきなり学校と話しをするのはちょっとという方が、まだ多いことと思います。そうした方は、まずは行事の日や学校が開放されている日を選んで、学校に足を運んでみる所からはじめてみてはどうでしょうか。

市内の各小学校や中学校では文化祭や体育祭、合唱祭等の行事の時には学校を開放すると共に、父母や地域の大人の積極的な参加や協力を求めています。また、最近ではこうしたイベントの時だけでなく、廃品回収やバザーなどのお手伝いや子どもたちの普段の姿を見てもらおうと公開授業や学校公開週間等を設ける学校も増えてきました。

さらに、例えば大雪の降った翌朝の歩道橋・枯葉の積もる横断歩道・視界を遮る校庭の雑草・体育館脇のゴミなどの清掃を手伝う人がいれば、どんなに子どもたちも安心して登校することが出来るでしょう。

こうした機会をとらえて学校に足を運んでいくことで、徐々に学校との距離感を縮めていくことができるのではないでしょうか。そしてはじめは難しくても、やがて子どものことを相談したり、地域行事への協力をお願いしたり、あるいは学校から行事への協力を求められたりという関わりが生れ、それが家庭・地域・学校の連携へとつながっていくのです。

子どもたちを健やかに育てていく、その第一歩として学校行事や学校開放日には積極的に学校に足を運び、家庭・地域・学校の連携を深めていきましょう。

③　地域の経験者の話を聞く機会を授業に取り入れよう

学校教育は今、学力の向上と共に、子どもたちの人間としての成長を目指した取組を進めています。豊かな人間性や人として優しさや強さを育むためには、学校だけではなく、地域の方々の協力が必要となってきています。

◇生きた知恵を学ぶ機会

子どもたちにとって「勉強する」とは、どういったことなのでしょうか？これまでの学校教育は、たくさんの知識を正確に覚えることに重きを置いてきました。

知識を覚えていくということは決して悪いことでもありません。しかし、覚えた知識の量を増やしていくことだけが人間としての成長ではないこともまた事実です。

人を思いやる心や、困難を乗り越えていく力など、豊かな人間性や人としての強さを身に付けていくことが、ますます重要になってきています。

◇地域の先生―大先輩

そのためにも、これからは先生以外の人生の先輩である地域の方々の協力が必要となってきます。自分が目指しているものや、仕事の困難を乗り越えた経験、家族や友達を大切に思うきっかけとなった出来事を語る中で、生活をしていく上で、大切なことがあることを、子どもたちに示していけるのではないでしょうか。

また、そういった大人の話を聞いて「自分だったら…」と感じることが、子どもたちが、未来の自分のなりたい姿を描き始めるきっかけともなっていくのです。

学校でも「総合的な学習の時間」では、持続可能な社会とグローバルな視点を取り入れ、変化の激しい社会をたくましく生き抜く力を、地域の方々と協力しながら育んでいます。

④　子どもの地域社会での活躍を学校に知らせよう

かつて兄弟姉妹の数が多かった時代には、姉や兄が下の妹や弟の面倒を良く見て、オムツ換えや子守の役をこなし、少し大きくなった子ども達を集めて遊びのルールを教え、遊びの中で人間関係を学ぶ機会が在りました。

◇町おこしを子どもと一緒に今では、少子化を反映してか近所で子どもたちが暗くなるまで真っ黒になって遊ぶ姿をほとんど見ることがなくなりました。現代のように地域の都市化や少子化が進むなかでは人間関係が希薄化し、地域社会の基盤自体が揺らいできているともいえます。

しかし、そうした状況であればこそ、地域の人々が自分の住む地域に誇りと愛着を感じ、大人たちが手を携えて子どもたちを育てていく環境を作る努力が求められています。

今、各地域では、町内会、商店街、青年会議所、地場産業などが伝統的な祭りや町おこしの行事などを様々な形で実施しており、年々盛んになる傾向があります。こうした町おこしの活動を子どもたちの豊かな心の育成に是非とも活かしたいものです。

また、身近な地域のボランティア・スポーツ・文化活動、青少年団体の活動は、それぞれ社会貢献の心を育む、心身を鍛える、情報を豊かにするなど様々な活動の目標を持っており、異年齢集団の中で子どもたちが切磋琢磨する大切な機会を提供しています。

◇「子どもを使った大人の行事」になってない？

子どもたちは、年齢が上がるにつれてそれらの活動への参加に消極的になる傾向が見られますが、今後はもっと積極的に子どもたちが参加するよう、子どもと一緒に活動するプログラムのあり方を考えていく必要があります。

ともすれば「子どものために企画された行事」が「子どもを使った大人の行事」となってしまう場合が少なくありません。地域の行事を子どもたちにとって魅力あるものとし、参加意欲を高めるため、子どもたちが行事の企画に携わるような責任を伴う役割を受け持つようにするなどの工夫が大切です。

さらに、地域社会での活動を学校のプログラムの中にも取り入れ、地域での活躍が学校でも評価されるような取り組みが望まれます。

Ⅳ　子どもの生きる力を信じて夢を与えよう

①　遊びの大切さを認め、冒険をさせよう

◇子どもの遊びの変化

子どもたちの遊びの本質が変わり始めています。数人で公園のベンチに座っていても、一人ひとりが小さなゲーム機を持って、それぞれがそれに向かい、一言も話さないで夢中になってゲームをしています。

さらに、今何を一番したいかとたずねると、ゆっくり眠りたいと言う子がいるなど、子どもの生活が一変してしまったかのようです。文部科学省の調査によれば、日本の子どもは友人と家族との交流や関係が希薄で、家庭でのお手伝いが少なく、テレビやビデオの視聴時間が長く、ゲームに費やす時間が長いことが、国際比較によって明らかにされています。

◇経験による問題解決能力

知識の習得にはテレビやビデオも大切ですが、子どもの成長にとって必要な、活発な身体運動の機会・人間同士のコミュニケーションの機会・自然や社会での直接体験の機会、創造・工夫などの機会が著しく損なわれていると言えるでしょう。

一昔前までは、こうした機会を子どもたちは日常生活や仲間との外遊びを通して、自然発生的に得ることができました。子どもにとって遊びは疑似体験であり、大人になるための練習の場であり、危険を伴いながらもスリルと興奮を目覚めさせ、子ども自身、気持ちが良いと思う程の心と体の一体感を感じ、それが楽しいという言葉で表現されます。

この機会が充実し、満足した遊びが得られれば、危険を回避する力、物事の変化に対する予測や大まかな対処の仕方を目安として持つことが出来るようになります。

◇社会体験と友情

また、さまざまな世代とのコミュニケーション能力を養うことは、いろいろな立場の人を理解するための方法を学ぶことでもあり、そのまま自分が社会に受け入れられることでもあります。

更に、この時期に仲間をもつことは、子ども時代の貴重な思い出を作り出し、一生涯の変わらぬ友情を約束してくれることでしょう。

子どもの遊びや冒険心を尊重し十分体験することが、豊かな人間性を育むための大切な糧となるでしょう。

②　自然体験活動などの長期プログラムに参加させよう

◇センス・オブ・ワンダー

「人間を超えた存在を認識し、畏れ、感嘆する感性を育み強めていくことには、どのような意義があるのでしょうか。自然界を探検することは、貴重な子ども時代をすごす愉快で楽しい方法のひとつに過ぎないのでしょうか。それとも、もっと深い何かがあるのでしょうか。

私はその中に、永続的に意義深い何かがあると信じています。地球の美しさと神秘を感じとれる人は、科学者であろうとなかろうと、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることは決してないでしょう。

たとえ、生活の中で苦しみや心配事にであったとしても、必ずや、内面的な満足感と、生きていることへの新たな喜びへ通ずる小道を見つけだすことができると信じます。」これは、『沈黙の春』の著者、レイチェル・カーソンが書いた『センス・オブ・ワンダー』の一節です。

◇命の輝き、動物体験

自然界のあらゆる生命がおりなす営みに対する多くの感動体験の中に、自然の循環・共生のシステム、生命の尊さを学ぶことにより、自然を大切にすることの意味、さまざまな立場の人を思いやることの大切さが会得できるというのです。

しかし、子どもを自然の中にただ連れて行くだけでは、生命の尊さ自然の循環を理解するようにはならないでしょう。それには、自然についての情報を持ち、自然界に配慮しようという大人と一緒に経験することです。いくら言葉で、命の大切さを訴えたところで、実感が伴わなければ、「害虫なら殺してかまわないのか。」という疑問に即答することは出来ないでしょう。

◇自然体験プログラム・長期キャンプへ

今、子どもたちに１０００m以上の山に自分の足で登ったことがあるか、またはテントで朝を迎えたことがあるかを尋ねると、半数以上の子どもは経験がないといいます。

自分が立っているこの地球を自分の足で歩いていくことが、生きていくことの証であるように、この国の豊かさと共に四季の移ろいを感じる心と、山や海の美しさや自然の営みの中の厳しさを私たち大人がもう一度見直し、是非、子どもと一緒に自然観察をし、ネイチャーゲームに参加し、山村留学や自然体験活動の長期プログラムに積極的に参加させてください。

きっと、子どもたちは自分の中の優しさや強さに気付いて、困難な道でも勇気を持って歩むことを記憶に残してくれるでしょう。

③　大人が夢を語って聞かせよう

今、子どもたちが夢や未来に希望をもてなくなっていると言われます。それほど、社会がすさんだ状況を子どもに見せていることだとも言われています。

テレビや新聞からは、青少年の凶悪犯罪が人々を驚愕させ、いじめや学級崩壊が社会問題となり、幼い子どもの連れ去り事件が発生し、親が子どもを虐待死させるなどの報道が後を絶たないのが現状です。

◇世界平和と自然環境を・・・

世界では今も戦争が行われ、子どもや女性が犠牲になるなどの悲惨な状況が伝えられ、人間の非業さを垣間見る思いです。

他方で、環境破壊による地球の温暖化が進み、日本も含めた先進国の飽食により、森林伐採や乱獲が行われるなど、食物連鎖や自然体系がゆがみ始めているという印象を受けます。このような状況の中で、子どもに夢を持てと言っても難しいことなのかもしれません。

しかしながら、大多数の人々が社会の中で額に汗して労働し、日々の暮らしを誠意と善意を持って営んでいる結果、私たちは、こうして毎日温かい食事をとり、衣服を身につけていられるのです。そして、世界は確実に平和を目指して歩んでいます。さらに、今ほど天然資源や自然環境が有限のかけがえの無いものという共通の認識として育ったことはないのではないでしょうか。

◇これまでの歩みを・・・

日本においても、戦後の混乱からやっと豊かな生活が営めるようになり、今では栄養失調や餓死する子どもはほとんど見られず、字の読めない人も皆無に近いのではないでしょうか。

職業の選択や進路や結婚の決定についても、本人の意思が一番に尊重されるようになり、出生や人種や性別や職業によって誰も差別してはならない世の中になったのも、先人の努力の結果に他なりません。

このような社会の歩みを経て、私たちの生活が維持できており、これからの歴史を決定づけていくのも私たちです。今後は、これまでのような生活や暮らしを維持するためには相当の努力が必要になってくるでしょう。

私たちができることは、再生・共生、持続可能な発展といった世界的な基準を進展させていくことであり、世界の平和や地球環境の保存に役立つこととなるでしょう。

そのための役割を私たち一人ひとりが担っていかなければなりません。このような課題を夢に変えて未来を考えていくことが重要でしょう。

④　愛をもって、期待し、励まし、見守ろう

荒れる子どもの問題行動や青少年犯罪の背景を見るとき、育った環境や関わった大人、地域社会の責任も問わなければならないでしょう。

子どもが健やかに育つためには５つの基本的な条件が必要だと言われます。

◇５つの条件

①子どもの健全な成長を無条件に支える、責任と愛情のある大人を少なくとも１人持っていること。
②しっかり眠り、しっかり遊び、しっかり三食食べ、「居る」ことのできる安全な場所を持っていること。
③健康なスタートと健康な生活習慣をもっていること。
④他人のためになることを行う機会をもっていること。
⑤職業を持つための技能・知能を身につける機会をもっていること。

誰からも愛されず、誰からも期待されず、食べていくためだけの孤独な毎日を過ごして心の荒れない子どもがどこに居るでしょうか。

◇愛と期待を・・・

私たちは、今一度子どもの心と体を健やかに育てることに、大人としての愛と責任を自覚せねばなりません。

自由という名の放任や無関心も、子どもの心を空虚でさびしいものにします。大人の不用意な言葉に、敏感に反応してキレる子どもたちの心には、自分に向けられない関心や愛情の無さへの悲しみの表現なのかもしれません。

悪い条件の中に育った子どもたちが自分の困難に打ち勝つためには、『その子どもを愛する大人との強い人間関係』が必要です。次に、『その子どもに対する期待』そして『意義ある活動に参画する機会』が必要だといわれています。

◇親の前や家では違う顔

子どもが社会的責任や社会参画をするための能力を養う基本的な場所は家庭であるはずです。

しかし、最も難しいのも家庭です。なぜなら、親は子どものことを知っているつもりでも、実は知らないことのほうが多いからです。それに、自分が生み、育てたという意識から、別人格として認めにくいのです。

そんな時、「親を変えるには、子どもの能力を目の当たりにするのが最も手っ取り早い」のです。子どもは、家の中で見せる顔と外の顔が違うのです。子どもの社会参加能力を育てるためには、学校や地域ぐるみのプログラムを。子どもと大人が共に企画し運営する中で、大人は子どもを再発見できるでしょう。そして、愛を持って、期待し、励まし、見守ってあげましょう。

⑤　子どもの可能性を信じて未来を託そう

子どものしつけとは、その子にどう育ってほしいのか、何を身に付けてほしいのか、家族や社会が期待していることを、その子が自主的・自発的に動けるように教えていくことが大切です。

期待する行動が、当たり前のこととなって、考えなくても自然とできるようになることがしつけといえるでしょう。

◇二つの大切なこと

しつけに関しては、二つの大切なことがあります。一つは、自分の期待することを子どもの自尊心を傷つけないように伝えることです。

子どもの自尊心を傷つけないこと、これは時代や文化を越えて一番大切なことだと思います。相手の顔色を見ながら不承卑屈な気持ちで従うというのは、本当のしつけではありません。

そしてもう一つの大切なことは、信頼感の高い人の教えならば信じられるということです。子どもだけでなく、大人も、尊敬できる人、信頼できる人の言うことなら受け入れられるものです。そういう意味でしつけとは、学校においても家庭においても信頼関係を軸になされるものであると考えられます。

◇心に火をつける人

では、子どもたちが、期待する行動を自然とできるようになるためには、どうしたらよいのでしょうか。それには、『子どもの参画』を促すことが重要だと考えられます。

参画とは、子ども自身の問題解決や自らの境遇に影響を与える意思決定の過程を共有することです。私たち大人は、ただ子どもたちが真に参画の道を歩めるように力づけること、子どもが自分を見つけ、子どもの最もよいところが、社会の中で発揮できるように道標を示すだけでよいのではないでしょうか。

私たちが出来ることは、子どもが自分の力で行動を起こすよう、子どもの心に火をつけることです。

◇発達と成長

子どもたちは発達途上の人間であり、失敗を繰り返して大人になっていくものであり、大人になっても失敗はあるものです。うまくいかない時には、やり直すチャンスを作ってあげましょう。

また、人が意欲をもって何事にも立ち向かうには、必ずそばには自分を認めてくれる人がいることが重要です。心ある大人が、寛大な気持ちで子どもたちを認め、そっと見届けてあげましょう。

そういう人がいて初めて人は自己を高められるものだと思います。

現代を滑り台会社と表現する人がいますが、滑ってしまえば下まで落ちてしまうということ。誰かが手を差し伸べ、やり直したり、途中で励ましたりして再挑戦する機会を作ってあげましょう。

◇社会に参画する力

子どもが社会や自分たちの問題解決に参画することにより、その過程の中で自分の“能力”が何かを発見し、その“スキル”を磨いていく。それこそが『生きる力』ではないでしょうか。

知識をつけてやることも大切ですが、あらゆる問題を自ら解決しようとする意志と態度、技能を持って、社会に参画する力をつけた子どもを育むことが大切です。

学校もまた、『社会に参画する能力』つまり、人と対等に、人を差別しないで、意見の異なる人とコミュニケーションをとる方法を学ぶ所です。人と付き合うための実際的なスキル、話し合いの仕方、合意形成の仕方、社会への関わり方などを学ぶのが学校なのです。

◇生きる力を信じて・・・

私たち大人のなすべきことは、このような子どもたちの生きる力を信じて、じっと傍らで見つめていてあげること、そして、この国に生を受けた私たちの文化や、世界の秩序や平和、限りある地球の資源や次世代に引き継がなければならない自然のことなど、これから大人になる人たちに果たしてほしいことを語り継いでいくことではないでしょうか。